

久高島に於ける「家」「ムトゥ」について

比 嘉 康 雄

はじめに

久高島は沖縄南部知念半島沖約六キロの太平洋上にある。周囲八キロ南北に細長く平べったいサンゴ礁の島である。貝塚発掘調査によると二千年以上前から人が居住していたことになっている。貝塚、井泉、葬処、拝処の位置等から考えると、魚介類採取時代は島の北辺に居住し、農耕以後は南辺の現集落に移動して現在に至っていることがわかる。久高島に於ける農耕（主に五穀）開始時は不明であるが、沖縄全般と同時頃と考えてみると一千年前（現時点で）位ということも出来る。おそらくその頃から久高人は現集落辺に居住し島の北辺を農地にしていたと考えられる。本稿ではその農耕のはじまり頃から形成されていく「家」と家の増加（人口増加）に伴って成立していく家々の始親家「ムトゥ」についてその発生過程と内容（主に守護神）について考えてみたい。

（一）家の発生

1 家呼称からの検討

久高島での家呼称は、①ヒブイ②イラチャ③アサン④キネーがある。①②④は現在でも祭費の供出の告示等に「イラチャからいくら」と言い方で使われている。なお①のヒブイは②のイラチャに比較して使用頻度は少くないようである。③のアサンは家のハレの呼称で「ア・サン・マーイ」（イザイホーの儀式でナンチュ（妹）とウィキー（兄）の盃事）「ア・サン・ウガミ」（家レベルの祭祀）というようにして使用される。①②④は③のハレに対して日常の家呼称ということになる。なお④キネーは家庭の意である。①のヒブイというのは煙の意で②のイラチャとは家の形状屋根の頂上の部分の意である。この①ヒブイ②イラチャの家呼称から考えられることは、家とは火食

のカマドがあり、雨水を凌ぐ屋根のあるものであるということになる。おそらく久高島に於ける初源の家は火食のカマドを室の中心に据えた穴家（掘っ立て小屋）であったと考えられる。

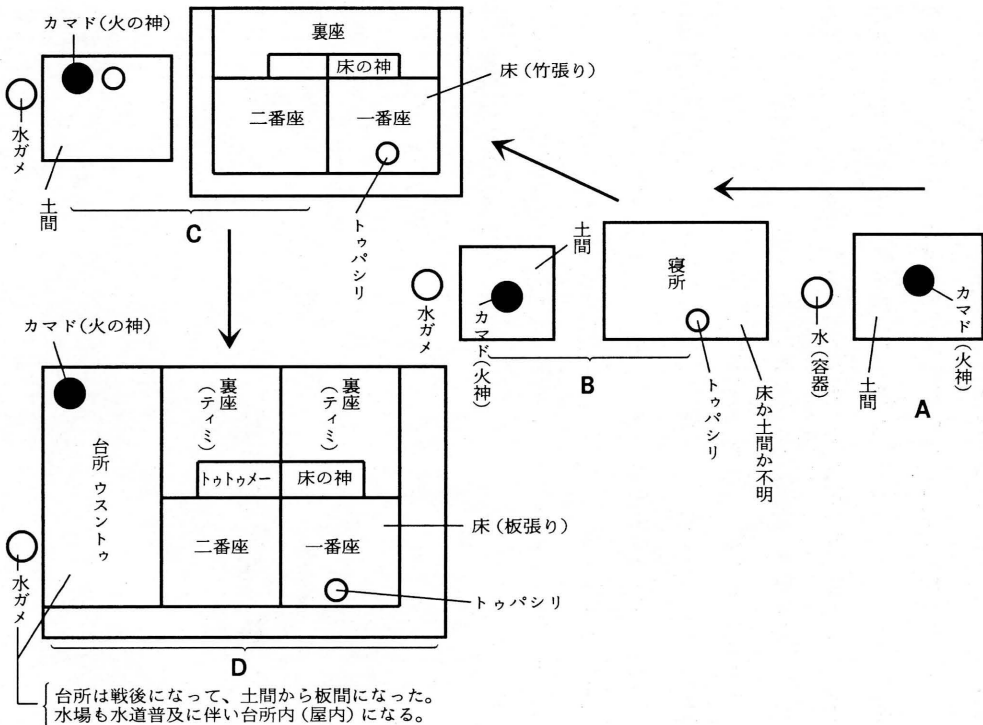
2 家の発達過程と守護神

前項で記した火食の火を中心に据えた一室形式の最初の家から、寢所居間等が独立し二棟形式に移行し、やがて現在の多くの家の形式に残っている、火食のカマドの棟と寢所居所の棟が合併した。台所、一番座、二番座、裏座形式になったことが考えられる。二棟形式は戦前まで何軒が残存していたといわれる。現存している住居で一番古いと考えられるハマミシダカリ家は二棟形式を残している。

同家の主屋は本格的なヌチャ（柱に貫孔を^{ぬきあな}あけ、貫を通して楔で締める構造の建物）でチャギ（イヌマキ）材が使用されている。

最初はダキブチ（竹製の屋根）であったが大正の頃現在の赤瓦葺になったという。同家の祖先は首里王府時代唐船の船頭をしたと伝えられていてその財力で同家は建てられたといわれている。築年代については明確ではないが二百年以上はなるといわれている。久高島の家の発達過程（間取中心）を図示すると下の通りである。

下図で注意したいのは火食のカマドについてである。前項でも記したように図Aの初源の家というものは、火食のカマドを室の中心に据えてある。このことは、火食のカマドのために建物としての風



雨を凌ぐ家が作られ、後に述べる家族も火食のカマドを囲むことによって成立していったということが考えられる。つまり建築としての家成立、又その家に住む家族の成立が火食のカマドに起因しているということである。この初源の家レベルで火食のカマドを管理する者がそれを囲む者達の養育者の存在であり、火食のカマドの火はその養育（守護）の本源であると認識されたと推察することが出来る。この認識は図Dの段階つまり現在まで継承されている。火食のカマドを管理する者は当家の主婦であり火食のカマドは火神^{ヒルカミ}として規定され家にある守護神の中で初源の守護神として認識されあらゆる祭祀に於いて必ず最初に火神^{ヒルカミ}から祈願がおこなわれている。図AからBまでの段階では家の守護神としては火食のカマド（火神）が唯一のものであったと考えられる。その時には家族の平穩無事を火食のカマドを管理する者（母親）が火食のカマドに向って祈願をしていたと考えられる。もちろんこの段階では火食のカマドが今日のように火神^{ヒルカミ}という定形としての認識もなく又定形の言葉もなかったと考えられるが、火食のカマドを管理する者は事ある毎に自分の言葉で火食のカマドに向って祈っていたと思われる。これが後に主婦が家の守護神（神）として位置づけられる背景（歴史的必然性）になつていったと考えられる。図C Dの段階になると家の守護神トゥパシリ、床^{トウパシリ}神^{カミ}が加わっていった。床^{トウ}の神は当主（男性）の守護神であるが、名称が床に結びつけられていて、家がC Dの段階つまり

床というものが作られた時点以後のことであるということが考えられる。久高島にいつ頃から一番座二番座形式の貫家^{マヤ}が作られたかは不明であるが、近世首里・那覇の影響で作られたと考えられ、そう古いことではないことは確かである。床の神はトゥパシリの対として形式的に認識されていて、祭祀の時も常に最後に拝されている。これに対してトゥパシリは当家の主婦の守護神で現在では家の守護神の中心に位置づけられている。トゥパシリとは戸の走る処つまり戸口の意で祈願の祭に香炉を戸口に据えておこなうことからの呼称といわれている。トゥパシリの香炉は平素は特に定まった置き場所はなく多くの家で一番座東側に柵等を作り置いてある。トゥパシリの場合は一番座二番座形式の家が普及する以前からあっても不自然ではない。トゥパシリの香炉はイザイホーという神女就任儀礼と関係していることから考えると、久高島にノロ制度導入後の四五百年前からあったことが推定できる。後述するがこのトゥパシリには当家の主婦の亡祖母の霊が依り憑くと考えられていて、当家の主婦はこの祖霊の守護力を背景にして家族を守護することになっている。おそらくこのトゥパシリの設置を起点に明確に祖霊崇拜それも母をたどる信仰形式が成立していったと考えられる。それと同時にそれまで家に於ける唯一の守護神であった火食のカマドを火神^{ヒルカミ}として規定し、家族を養育する尊い存在又家の守護神の祖形として明確に位置づけたと思われる。

3 家族の発生

久高島に於いては魚介類採取時代は火食のカマドを据え柱を地面に掘り立てて作るいわゆる穴屋アナヤといわれる様式の家はまだなかったのではないかと考えられる。前項で図示した久高島の初源の家は定着性が必然的になる農耕以後のことではないかと思われる。この火食のカマドを据えた穴屋の発生つまり家の発生とこれに住む家族の発生は同時であることはいうまでもない。それでは家の発生を神話から見てみよう。久高島の人創り神話は兄妹始祖神話である。昔久高島の対岸にある玉城村百名ムラからシラタル（兄）ファガナシー（妹）の兄妹（玉城村側の伝承では従兄妹）が船で来島し、最初は採取生活をして島内を移動しながらくらしていたが、やがて鳥の交尾を見て男女の道を知り夫婦になった。そうして子生みがおこなわれた。一代は全員女性で身体障害者が三名、健常者が二名生まれその中の一人が外来の男を婿にしその子孫が久高島のムトゥ家の始祖に成ったという。なおこの始祖神話は長い伝承の中でそれぞれのムトゥ（草分け家）に於いて子細の筋書きが少しずつ変えられているが概ね記した通りである。家も現久高集落の最上位にあるタルがナームトゥ（久高殿内）に定着したことになる。この兄妹始祖神話を検討してみると、先づ兄と妹という兄妹が夫婦になったということが特異である。更に五名の女の子を生むが三名は身体障害者で二人が健常者であった。そうしてこの健常者の一人が外来の男を婿

にしてこの子供たち兄妹の始祖からすると三代目から久高島の人々の実質的な始祖として考えられている。これ等のことは結論からいうと第一章で記した母親中心の社会から一夫一婦制へ移行する過渡期を表現していると考えられる。つまり兄妹婚ということは母親を核にしてその子供達が集居していた社会のイメージを発想の根拠にしていると考えられる。すなわち集居している兄妹が男女という認識ではないかと思われる。又全員女性を生みそのうち多数（三名）が身体障害者であるということは母親中心社会の崩壊をイメージし、インセンスタブーを意識したことではないかと考えられる。そうして最終的には健常者の娘が外来の男を婿入りさせることは妻訪婚、入婿婚の表現つまり母親中心社会の母親（女性）を基軸に男性を加えて家と家族が成立するということである。この兄妹婚神話から見る限りともかく久高島に於ける家族の始源は男と女つまり夫婦から発したということになる。しかしその内容は現在の家族のように最初から男女が夫婦として同居したということではなく神話の表現にも見たように男性が女性家に通うという形態ではなかったかと思われる。つまり母性性の強い家族ということである。その裏づけを記すと、これまで述べて着た家の守護神が女性（主婦）の祖母をたどって形成されていることが最も母性性の強さを表している。なお男性は床の神という形式的な守護神が配されているが当主（男性）の父系をたどるということはない。但し主婦の亡祖母をたどる際主婦の

父の母をたどるといふ父系が交差するケースがあるがこれも結果的に母系をたどるといふことには変わりない。又久高島でも大正十二年頃から沖繩本島辺に倣いいわゆるトゥトゥウメーを設置するようになり現在では多くの家に仏壇が作られトゥトゥウメー（祖霊の位牌）が置かれているが伝統的な家レベルの祭祀外にあり、特別の時以外には拝さない家が多い。つまり父系をたどって祖霊を祭るといふ觀念は芽生えても実質的ではないということである。久高島ではおそらく一番座二番座形式の家が普及するようになって以後男性の守護神も置かれたが依然として家の守護神は母性が担い現在に至っているということである。現在の家のように婚後最初から男女が同居するようになったかについてはいつ頃かということとは判然としないがこれまで述べて来たことから推察してもそう古いことではないといえる。なお記したように近世になって父権制が芽生えた現在では沖繩全般と同じように家督の相続は男子の長子がおこなうことになっている、そのことを見る限りに於いては久高島も父系制であるが、記して来たように家の成り立ちや守護神という視点では家族は母系制的であり、又母系制と父系制の未分化の状態にあるという言い方も出来る。

4 主婦と家

ともかく久高島の家の初源は母性性（主婦）を軸にしておこった

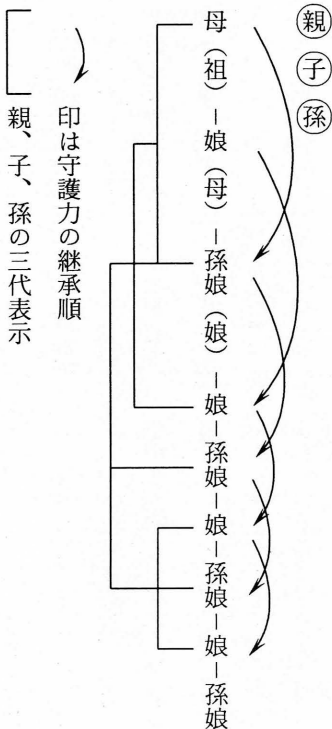
ということである。つまり主婦は火食のカマドを管掌しこれで家族成員を養育して、この火食のカマドに向かって家族成員の平安無事を祈ったのである。もちろん食糧入手については家族成員が協力しておこなったことは言うまでもない。やがて主婦（妻）と夫が家の基本つまり現在のように一夫一婦制になっていくという経過があり、トゥパシリという主婦の守護神が規定され、火食のカマドも火神と称され家の守護神の最初の神として認識され、主婦は初源より現在に至るまで、家族成員の守護者として位置を継続して来たのである。今でこそ島と本島を一時間内で連絡する定期船があり、女性も島を出ることは容易であるが、戦争前頃（昭和の初め頃）までは定期船もなく、要請に応じて船を出すという状態で年に二回正月と八月の買い物に出るといふのが一般的であったといわれている。もちろんそれ以前は女性はずっと島外に出るということはなかったと推察することが出来る。つまり久高島の女性は島で生まれ育ち、家族を形成すると家を守り家族成員の守護者（神）として一生を島と共に生きたのである。これに対して夫（男達）は船を操り、首里王府以後は定期的に長期遠洋出漁をおこない島を留守にするという生活パターンが続けられた。男達は出漁の結果、物品や金銭を得、近世になるとその成果で本格的な買屋も作られることになるが、しかし男達が出漁している間の日常生活は主婦（女性）達が農業をし、イノリから魚介類を採取して担い家と家族を守っていたのである。そうし

て出漁している夫や息子の無事をトゥパシリ。火神を通して祈っていた。つまり主婦は実生活の糧を得ることと、家族の平安無事を神に祈るという守護者の立場を担ったのである。もちろん近世の通貨制度以後になると日常生活の糧を男達が主に担うということもあるが、主婦が守護者という位置は現代まで変わることはなく継続されている。

5 守護力の継承

主婦が家の守護者としての根拠になっている前述した「トゥパシリ」は亡祖母のシジ（霊威）である。主婦が長女の場合は父親の亡母二女の場合は母親の亡母である、なお三女以下はその他の近親の亡女性が継承される。長女の場合は同居シジということで生前可愛がられた体験を持っている、もちろん二女の場合は別居ではあるが可愛がられた記憶がある、三女以下の場合も知っていたりするケースが多い。つまり主婦の守護神であるシジは主婦が幼い時に可愛がってくれた人（祖母）でこの人（祖母）が死して別世界に移った時可愛がられたという現象が守護する力に昇華され以後主婦の守護神になるということである。このシジの継承式が十二年毎の午年におこなわれるイザイホーである。守護神であるシジを「タマガエーヌウプティシジ」と称し、このシジを継承し実質的な守護者に成った主婦を「タマガエー」と称している。この守護者の視点から主婦を考

えると、主婦がやがて年老いて死を迎え別世界へ移ることになるがこの時主婦は守護者から守護力そのものつまり「タマガエーヌウプティシジ」になる。そうして生前守護力として祭ったシジ（亡祖母）はその役目を終わりタマガエーヌウプティシジの居所であるウタキにとどまることになる、これまでのようにタマガエー（孫娘）やトゥパシリの香炉を通して現世に顕現することはなくなり個性を失い歴代の久高島のシジ（女性）達と一緒に「シージン」という神格となる。一方亡くなった主婦はその孫娘の適齢期（二〇歳―四一歳）を待ってイザイホーの儀式を通して「タマガエーヌウプティシジ」という守護力をそなえた神格となり、孫娘とトゥパシリの香炉を通して現世に顕現し、子孫を守護するという任を果たすことになる。守護力（タマガエーヌウプティシジ）と守護者のタマガエーの継承は左図のように展開される。



前図でもわかる通り、主語力は母親をはさんで祖母から孫娘へと継承するパターンを代を重ねて展開する。守護力（タマガエーヌウプティシジ）の任は一代で終わる。つまり三代毎に守護力の内容が完結し次は一代重なりながら三代で完結するという展開を続けるのである。この三代で完結するということはこれまで述べて来た通り「生前可愛がられた」という心情が軸になっている。つまり親（祖）を心情で認識することが出来るのが三代という範囲であるということである。したがって父系制のように何代にも亘って親（父祖）を積み上げることではない。このことは親（祖）を権威化することとはなく、愛護という純粋な心情のみが守護力の根拠になっているということである。又守護力の継承の展開は家にはこだわることなくおこなわれる。つまり祖母から孫娘へ継承され孫娘は生家を出て別家に移るということになるからである。このことは父系制のように家が父祖継承の重要な拠点としているのに対して、あくまでも形式にこだわることなく純粋に子孫を守ることが動機になっているということである。

（二）ムトゥ家の発生

ムトゥの語意は元つまり根源という程の意である。血縁を基準にして形成された草分家がムトゥである。

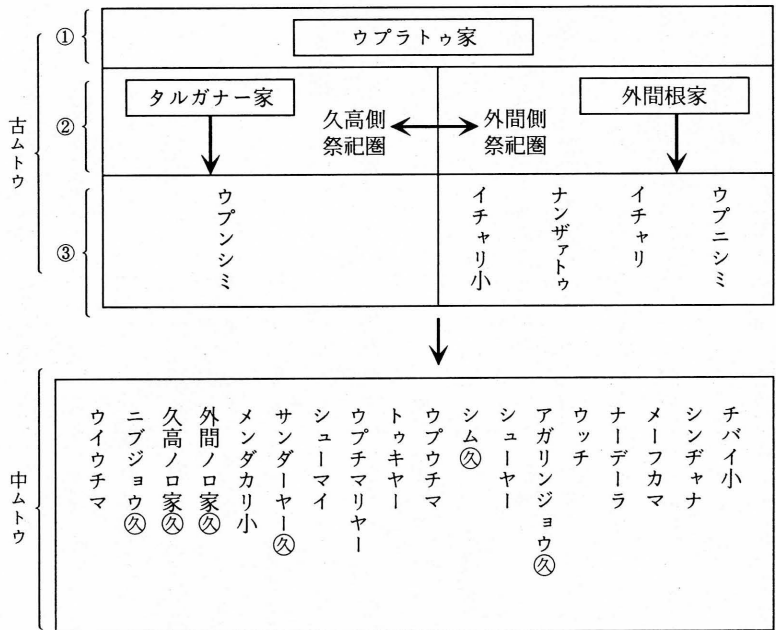
1 集落の構造とムトゥ家

現久高島の集落は島の南端部にある。島の北側島の広さの約五分の四は畑地や森（聖地）等である。集落の最上位（北側）に古いムトゥ家群が位置し、順次南側に家が展開し一番新しい家群は南端にある、つまり久高島の家群の展開に一定の法則性があることがわかる。仲松弥秀先生のおっしゃる親を背後（クサティ）にして子はその前に位置するの通り久高島も古いムトゥ家群（始祖）を背景にしてその前面に子孫達が展開している典型的な集落である。子孫が増えていくと家が広がって行くので家と家を継ぐ道路は生活の需要に応じて作られたと考えられるが、迷路のように曲がりくねっている道路状態はそのことを証明している。又久高島の意識も親元を分家する際は必ず親元の下方に家を建てることになっている。この法則性の根拠は「親に子は抱かれて育つ」というイメージであるといわれている。これまで記したことはムトゥ家と分家の関係であったがこの親に抱かれるイメージの法則性はムトゥ家とその上位の祖達とも同じように考えられている。第一、二章で記したように魚介類採取時代の久高島の生活の場合は島の北側であったと考えられている。もちろん魚介類採取時代の生活は島全体に展開しておこなっていたと考えられ現集落の中にも魚介類採取時代の痕跡があるが現集落以後の久高人はその上位の親達は島の北側つまり現集落からすればその背後ということに収束していったと思われる。それではムトゥ家

の背後に居たと考えられる久高人の祖達を現集落段階の人々が具体的にどのように認識しているかを考えてみたい。後述するがムトゥレベルの始祖の場合は始祖の来歴が伝承され、具体的に居住していた家（家敷）がありより具体的にイメージすることが出来るのであるが、古ムトゥの背後を生活の場としていた古祖達についてはいわゆる現集落レベルで考える家敷等というものはない。しかし生活に使ったと思われる井泉や居住していたであろうと思われる森等を認識し古祖の存在を規定していったと考えられる。そうして古祖達の居住していたと考える島の北辺、ムトゥ家群からするとその背後の空間全体を古祖達の存在している処と考えている。つまり現古ムトゥ群は更にその上位の古祖達に抱かれて存在しているということになる。この古ムトゥとそのはいごの古祖達の関係を最も象徴的に表現しているのは古ムトゥの一つタルガナムムトゥとその背後にある「フサティムイ」である。フサティとは腰当つまり椅子の腰当てのように寄りかかれるという程の意で、ここでは古祖（親）の意である。つまりタルガナムムトゥの場合はすぐその背後にあるのである。つまりタルガナムムトゥの場合は古祖（親）に直接抱かれているという状態にあるのである。

2 ムトゥ家の構造

現久高島の古ムトゥは下図の通り古ムトゥが八家、中ムトゥが十



中ムトゥの記載順とムトゥの古さの順位は無関係

ムトゥの序列

八家ある。中ムトゥの場合は現住者が居る普通の住居である（但し二家空家敷）、これに対し古ムトゥは現住者は外間根家を除いておらず建物だけがある状態である。これは古い程後継者の継続がとだえていくという自然現象という見方も出来る。又古ムトゥの大里家

の場合はかつて現住者が居た家と開祖を祭る建物は別棟になっていて、この開祖を祭る建物を殿と称している。ここで考えられることはムトゥの最初の段階はいうまでもないが一軒の家から出発し、やがて子孫が増え分家者が生ずることによって、分家者の子孫からは最初の家を始祖家として認識されていき、時間の経過と共に分家の数も増えていくが、ある段階からムトゥ家の開祖はムトゥ家の現住者の家とは別室又は別棟にして多くの子孫のために特別に祭るということになっていったと考えられる。現在では古ムトゥ中住居なしの一軒を除いて別棟形式になっているのは外間根家、イチチャリ小家である。しかし別棟形式になったのはそう古いことではなく例えば古ムトゥの外間根家が現在のように別棟の殿になったのは戦後のことである。ムトゥの始祖を祭る場合は別棟は原則として東方・別室は一番座の上方（東）同棟内の場合が一番座である。しかし一軒だけ例外がある。それは前述した外間根家の場合である。同家の場合には居住家が台所を東方・一番座を西方に配置されている。その理由として同居住家西側は庭という祭場になって居りその祭場に汚水が流れるのを考慮した結果例外的家屋配置になったといわれている。外間根家は開祖を祭る別棟を建てるに際してもそのまま居住家の原則で作ったことになっている。要するにムトゥ家の原形は家であり、それが歴史的経過をたどることによってムトゥになるということである。その際古いムトゥの場合は家的要素が希薄になりムトゥの始

祖を祭ることに重点が置かれ、比較的新しいムトゥ家の場合には家的要素と始祖神が未分化の状態になっているのである。前述したように古いムトゥの場合始祖を祭る処が

A 別棟独立型

B 住居内分室型

C 住居内合流型

がある。比較的新しいムトゥ（中ムトゥ）の多くは住居内合流型である。古ムトゥは始祖を祭る室が独立していることとそれに火の神と床の神が家の火の神、床の神から分離し、名称もムトゥ火の神、ムトゥの床の神に昇格し、特に火の神の場合は日常生活のための煮炊きするカマドの機能は多くのところでなくなり、石三つを置き象徴化しているところもある。中ムトゥの場合は始祖を祭る室は独立して居らず住居内にあり、火の神と床の神も古ムトゥのように家から分離独立して居らず始祖の祭祀の際には家の火の神、床の神が拝されている。つまり始祖を祭る場がまだ独立して居らず、家（生活の場）と未分化の状態にあるのである。

3 ムトゥの始祖神

久高島には三つの島建て神話がある。その概略を記すと
 ④島作り神話―アマミヤ（女神）が久高島に降り立ったが、島は海水にただよいまだ島の形をなしていなかった。そこでアマミヤは持

參の棒を岩石に突き立て天から草木土を降し久高島を創った。なお、この島作り神話はいくつかの説が錯綜し明確性を欠いている点があることに注意しておきたい。

⑧人作り神話―前章でも記した通り、久高島の対岸にある百名（現玉城村）から兄と妹が久高島に舟で渡島し、魚介類、草果類の採取生活をしながら居住場所を変え最後は現集落最上位（タルガナムトゥ）に定着し、鳥の交尾を見て兄妹は交わり、子を生みその子孫が久高島のムトゥの始祖に成った。

⑨五穀伝来神話―大里家（^{ラフトラ}）のアカツミー（男）がある日島の東海岸（インキ浜）で漁をしていると海上から白壺が漂って来た。アカツミーが白壺を取ろうとすると白壺は沖へ流れ、取ることをやめると白壺は再び岸に寄り、又取ろうとすると沖に流れるというのをくりかえした。そこでアカツミーは家に戻りシマリバー（女）からヤグルガー（井泉）で禊ぎをし白衣で行けば取れることを教えられた。

アカツミーはシマリバーの言う通りヤグルガーで禊ぎをし白衣を着て再びインキ浜に行った。すると不思議なことに白壺はアカツミーのところに寄って来て来て難なくアカツミーの白衣の袖に納まった。その白壺の中には麦、粟、アラカ、アズキの種が入っていた。麦と粟はハタスニートゥバルという場所に蒔き壺は同地に埋めた。麦粟はこゝからクニ中島中に広められた。なおこの五穀伝来神話も文献（遺老説伝、久高島由来記）の記載に当事者名の不一致が見られるが

本稿では久高島の伝承を基準に考察を進めたい。以上三大島建て神話は島作り人作り物作りという人間の存在条件の凡てを充足したものであるということがいえる。もちろんこの三大神話は単なる作話ではなくリァリティが含まれたものであると考えるが、本稿ではそのリァリティ性の検討は留保し、神話とムトゥの始祖について記すことにする。④の島作り神話のアマミヤは古ムトゥのイチヤリ小ムトゥ（家）の始祖として祭られて居る。四月、九月におこなわれるニラーハラー（他界、始源の地）の神々が来訪しておこなわれる祭祀の際ニラーハラーの主神の一人アガリ大主（^{ウツメシ}）の命でアマミヤ神が登場し、島作りをした棒をかざし島作りを再現する場面がある。⑤の人作り神話は前章家の発生でも記した通り古ムトゥのタルガナムトゥ（家）に属し、妹（ファガナシー）、兄（シラタル）が始祖として祭られている。こゝも④と同じにニラーハラーの神々の祭祀の時にファガナシー神（妹）が兄と共に渡島したいきさつを舞いながら唱じた。⑥の五穀伝来神話は古ムトゥのウプラトゥムトゥ（家）に属し、シラタル、ファガナシーは同ムトゥの始祖として祭られている。二月と十二月におこなわれるニラーハラー主神ニライ大主（^{ウツメシ}）が主催する祭祀の際、五穀伝来の神話の地（聖地）で同家のアカツミー、シマリバーの司祭によって祈願が行われる。なおこの三話の他に古ムトゥの一つ外間根家（^{ウツメシ}）にも始祖の話が伝えられている外間根家の始祖はムンパー（女祖）ムンプジ（男始）であるが、同始祖達は貝

塚にもなっているアグルダキに生活をしていたと考えられていて、十二月におこなわれるフバワクという祭祀に於いて、外間ノロの主唱でこの両祖の存在が唱されている。以上三ムトゥの始祖の共通点は、男女が対になった祖ということである。しかしいわゆる夫婦という観念は希薄である。つまりイチヤリグムトゥは男神の存在は希薄で女神を強調、女(神)男(神)の関係性も不明確、タルガナームトゥの場合は兄妹が始祖である。ウプラトゥムトゥは夫婦説もあるが明確ではない。外間根家の始祖は他の三ムトゥに比較して夫婦というイメージが強いが、夫婦ということを唱する神話等はない。又タルガナームトゥの始祖(シラタル、ファガナシー)以外は女祖を先にして称する。なおタルガナームトゥの場合も久高島渡島の発案者は女祖のファガナシーである。これ等のことを考え合わせると久高島の古ムトゥ家のレベルでの始祖は男祖よりも女祖の存在が強く観念されていることが考えられる。つまり久高島の古ムトゥは母系的な家に父系(男性)を混入させた状態(レベル)にあるとはいえる。又ムトゥの始祖(先祖)の多くは男女、夫婦ということではなく、高い神(神職者)、他島から来た等特殊な来歴を持つ者が祭られているケース等である。

4 ムトゥ神の守護力

前にも記した通り、ムトゥは家が時間的経過によりその子孫が増

えることによって発生することになるが、ノロ制度受容以前の久高島はおそらくいくつかのムトゥ家があり、そのムトゥ家が血族を束ねる中心になっていたと考えられる。そうしてムトゥ家にはムトゥ神を祭ってその守護力によりその血族が守護されるということであったと考えられる。後に述べるノロ制度受容以後のように定形化された生産に関する祭祀はなかったと考えられ、ムトゥ神の守護力の発輝は生死の不安定性に向けられていたと考えられる。ムトゥ神は血族の中心という崇めたてまつるといだけの消極的存在ではなく、血族を守るといふ積極的存在として考えられていたと思われる。

したがってムトゥ神(神職者)に成る者は血族の中でも特に感受性が強い者が、ムトゥ神の啓示によって就任するという構造になっている。ムトゥ神は崇りを解消する力、予言力、透視力等のパワーを持った存在であった、もちろんそのパワーの源はムトゥ神の守護力である。言うまでもないが、ムトゥ神(祖)は守護力のパワー源そのものの神職者(現存)はパワーの行使者ということであり、両者は不離一体の関係にある、つまりムトゥ神という時には、祭られた祖というレベルとその祖の守護力を行使する者と一体化したレベルがあるということである。ムトゥ神の中で特にパワーのあった者は死後その守護力(祭られたムトゥ神)から独立し新たな神格を形成するというケース又パワーをムトゥ成員の要望に応じて発揮するというケースもある。この後者のケースは「ティンユタ」と称され、ダ

キという管轄家を有し主に家レベルの招福除災を司る。おそらくユタ（シャーマン）の由来はこのようなムトゥ神のレベルにあるのではないかと私は考えている。又パワーの強いこのようなユタ（ムトゥ神）の名声は島外にも伝わっていったと考えられる。その象徴的な例がウプラトゥムトゥのムトゥ神「クウンチャサンヌル」である。

このムトゥ神は第一尚氏最後の王尚徳と恋におち、尚徳が久高島でこのクニチャサンヌルと逢瀬を過ごしている間に王府では政変がおこり、それを久高島で知った尚徳は帰路の舟から身を投げて死し、クウンチャサンヌルはウプラトゥムトゥ家のガジュマルに首吊り自殺をとげ、そのためクウンチャサンヌルはヌルの神格から根神の神格に格下げされたという伝承がある。尚徳は在位九年（一四六一—六九明の英宗から中山王として認承された）第一尚氏第七代の王である。喜界島征討、安里八幡宮の創建、十一回の中国進貢、又諸国との貿易も積極的におこなった剛毅英明な王として伝えられる（沖繩百科事典）久高島の伝承にある尚徳が政変を知り海に投身自殺をしたというところは史実としての信憑性に欠けるが、ともかく尚徳王が久高島に来てクウンチャサンヌルと会っていたということは事実であったと考えられる。伝承では恋愛が強調されているが、それは結果であって、私は尚徳王の久高渡島の動機は強いパワーを持ったシャーマンとしてのクウンチャサンヌルの名声にひかれてのことであったと考えている。クウンチャサンとは^{クニチカサ}国司の意で、これはお

そらく尚徳王との出会後の命名ではないかと思われる。そうしてこの国司の称は尚徳王が命名したか、あるいは久高島側から命名したかは判然としないが、ともかく尚徳王が特別に接していたシャーマンであったことはこの名称からも考えられることである。なおヌルと称していることは当時まだいわゆるノロ制度が施行されていないことを考えると、ムトゥ神のようなシャーマン性の強い存在に対して「ヌル」と称していたことがわかる。つまり後になって神職者を「ヌル」と「ユタ」に分化していくが、このクウンチャサンヌルの時代（ムトゥ神の時代）にはまだそのような神職者の分化はなく、神職者をヌルともユタとも称していたことがわかる。そうしてこの時代の琉球は各地に割拠するパワーの強いシャーマン（ユタともヌルとも称す）に人生の招福除災の相談するということが一般的にあったのではないかと思われる。そんな時代状況の中で一段と名声を博していた久高島のムトゥ神（クウンチャサンヌル）を尚徳王が認めるいは前述の命名のように国の専属のシャーマンとして指名し、事ある毎に相談（判示・占い）に行っていたのではないかと思われる。つまり王府のレベルでもシャーマンを相談役として認めていたということである。おそらく尚徳王は足繁くクウンチャサンヌルのもとに相談に通ううちに美人といわれていたクウンチャサンヌルと恋仲にもなっていたということであると思われる。

5 根神と根人

根神、根人の呼称は主に沖縄群島に一般的である。普通集落の根つまり根源的ムトゥ家を根家と称し、その根家に始祖を祭る根神(女) 根人(男)の神職者が居る。この両神職者は当根家の姉妹(ウナイ) 兄弟(イキー)が原則として就任し、終生勤める。根人は当家の長男が就任し当主的存在が強い。根神は祭祀を司る存在である。名称の根の下に「人」と「神」をつけてあることは兄(弟)は当主姉(妹)は神(神職者)ということ象徴的に表現していると考えられる。さて久高島の場合は根家、根神、根人はどうなっているかというと、先づ根のつくムトゥ家が①外間根家②根ウプラトゥ(ウプラトゥの別称)③イン根家の三家がある。三家ともシマレベルの祭場になっている。イン根家は海(イン)が強く意識されたムトゥ家で地理的にも集落の下方に位置しているので一応久高島の根源的ムトゥ家からは除外する。根ウプラトゥは久高集落の最上位にあり、五穀伝来の神話を有し重要なムトゥ神を輩出している、前項で記したクウンチャサンヌルも同家の出自であった。外間根家は根ウプラトゥの次位に位置し、ノロ祭祀の中心祭場外間殿を有している。結論から先にいうと根ウプラトゥは久高島のムトゥ家の中で一番古いムトゥであり、第一尚氏時代までは、前項のクウンチャサンヌルの存在等も考え合わせると、祭祀も含めて名実共に久高島の根源家であったといえる。これに対して外間根家の場合はノロ制度

が施行された第二尚氏時代になってからの根家ではないかと思われる。少なくとも祭祀のレベルに於いてはその感が強い。次章で詳述するノロ制度受容時に外間根家の根神的存在がノロ(外間)に就任し、根人はそのまま根人としてノロとのクサイ(対)として位置づけられたと考えられる。つまり外間根家の根神がノロに就任したということである。一方根ウプラトゥはヌルから根神に格下げされたといわれるクウンチャサンが根神の神格として位置づけられ久高島に於ける唯一の根神としてノロ等とシマレベルの祭祀の司祭団(クニガミ)になっている。但し同根神の神職者は外間根家の子女が継承するということになっている。つまり久高島ではシマの草分家根家に根人、根神という神職者の存在がそのままの形であるのではなく、根人とノロ、根神単独と変容しているということである。なお外間ノロと対をなす久高ノロの場合も久高根人が存在し久高ノロと対(クサイ)をなしている。久高ノロも外間ノロと同じく根神がノロに昇格した状態であると思われる。久高ノロの出自家は古ムトゥの一つタルガナムトゥで同所も外間殿と並ぶシマレベルの重要な祭場の久高殿になっている。かつて外間集落と久高集落の二つの集落を形成していたという時代に外間根家は外間集落の根源家、タルガナムトゥは久高側集落の根源家であったと考えられ、両家の位置もウプラトゥ家の次位の東(外間)西(久高)に位置している。

6 ムトゥへの帰属意識

久高島にも近世に首里を中心に成立し波及した父系優位のいわゆる門中といわれる同族集団が存在するが、久高島の祭祀とは直接関係せず新しく形成された制度という色合いが強い。記して来たように久高島のムトゥは島の成生と共に自然発生的に形成されたものであり、いわば門中（制度）が外発的であるのに対して内発的動機によるものである。したがって成生する事実の心意を累積して形成されている。ムトゥへの帰属意識は累積された時間の遠近によって異なることになる。前載ムトゥ序列表で示した通りシマ創生に絡む古ムトゥへは原則として全久高人が属することになるが、はるかな時間性にあるこのムトゥは血の連続性の実感は希薄であり、これに対しムトゥの場合は比較的時間が新しく現在の類縁関係もわかる状態にある。したがってその帰属意識は血縁同族意識が強く、現実生活に於いても同族意識は機能している。しかし門中のように文字で同族を根拠づけることはせず、あくまでも成生する事実を心意で受けとめて成立している。